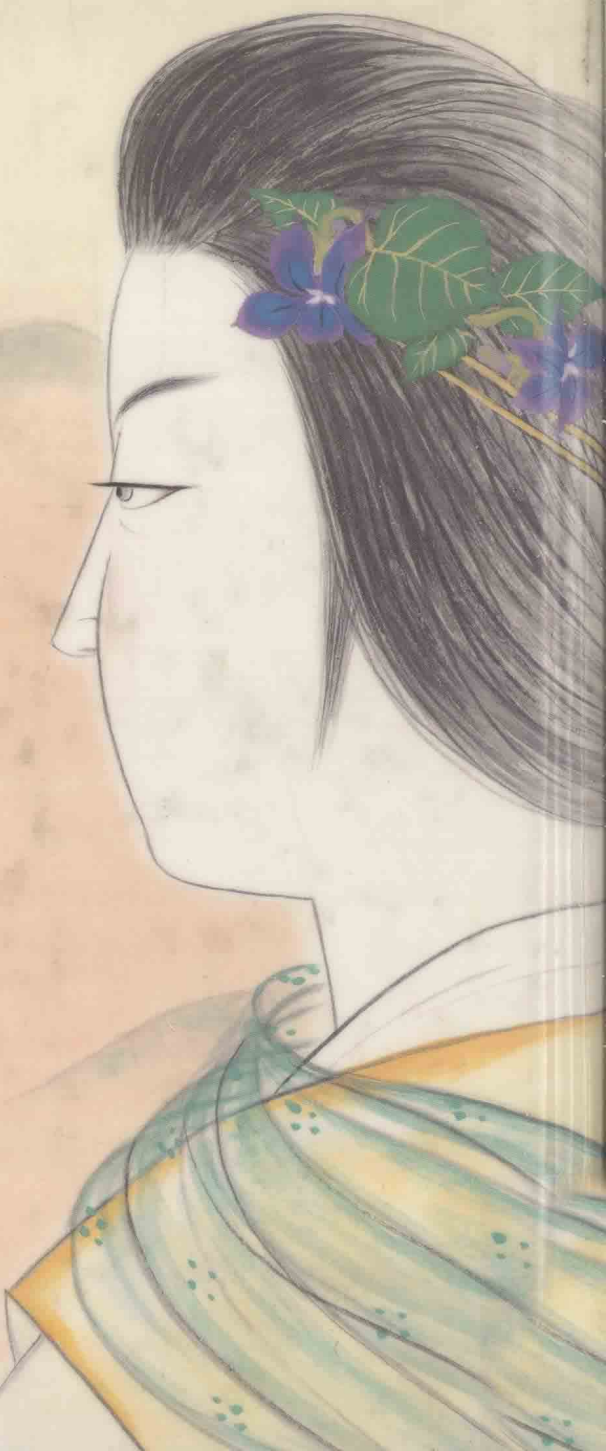
黒岩重吾

茜(あかね)に燃(も)ゆ

上



重吾に燃ゆ

小説 額田王

苏工业学院图书馆
藏书章

中央公論社

茜に燃ゆ——小説 額田王 上

©一九九二 検印廃止

一九九二年 二月一七日初版発行
一九九二年 四月二五日四版発行

著者 黒岩重吾
発行者 嶋中鵬二
印刷所 三晃印刷
製本所 大口製本
発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替 東京二-三四

ISBN4-12-002093-2 Printed in Japan

『茜に燃ゆ』上　目次

湖の女人　5
飛鳥の夜　45
悦楽の鬼神　105
川辺行宮の宴　145
大王家の禁忌　205
激動の虹　246

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

茜(あかね)に燃(も)ゆ——小説 額田王(ぬかたおう)

（上）

湖の女人

西暦六四八年の秋、十五歳の額田王は板屋根に草などが生えている飛鳥の旧板蓋宮で、退位した皇極女帝の思い出話を聴いていた。

愛していた蘇我入鹿が、女帝の実子の中大兄皇子らに斬られて死亡して以来、女帝は床に伏す日が多くなった。

中大兄皇子が、新しい宮を造るから、移るように、と女帝を説得しても彼女は諾かなかった。家や屋根に雑草が生え、塀も破れ、宮の柱に罅が入ろうと、住み慣れた宮の方が良い、といって動かない。

大王となった女帝の弟の孝徳（天萬豊日大王）は、中大兄皇子や、中臣鎌足らの進言で難波に宮を建てていた。

孝徳も思い出したようにやって来ては、こんな陰気な宮に住んでいては身体が悪くなるばか

りだ、海が見える難波の高台に宮を造るから、ぜひ移っていただきたい、と頼むが、
「朕はここにいると心が安らぐ、朕が住む宮はここしかない」
と孝徳の頼みを一蹴する。
中大兄皇子も大王も、女帝の頑固さに手を焼き、いつか気も変るだろう、となかば諦めていた。
そんな女帝が宮から出、飛鳥の山野を散策するようになったのは、この春、額田王が女帝に仕えてからであった。
額田王は、十五歳とは思えないほど頭が切れ、話術もたくみだった。それに奥が深く、その性格には柔軟性があった。
孝徳や中大兄皇子は、そんな額田王に眼をつけ、女帝の鬱病を治すことをできるのはそなただけだ、よろしく頼む、と額田王の屋形に珍品を届けたりしていた。
その日も女帝は、額田王をはじめ、気に入りの女官たちと香具山に行った。
女官たちは地方豪族が大王家に差し出した女人たちだった。采女と呼ばれている。
香具山は宮の北方にあり、甘橿丘の傍を通る。丘の北麓には、かつて蘇我蝦夷の屋形があり、女帝の行宮もあった。
女帝は板蓋宮に住む前、その行宮にいたのだ。入鹿と熱烈な恋の炎を燃やしたのも、行宮時代だった。

「大郎は勇敢な男子であった、鎌足が、朕が危篤だと欺き、大郎を宮に誘ったのじゃ、大郎は朕の身を案じ、身の危険も忘れ、単身宮に駆けつけてくれた」

行宮のあった豊浦の傍を通る時、女帝は今は廃屋と化した宮のあたりを眺めながら呟く。

大郎とは入鹿のことである。

女帝は自分のために非業の死をとげた入鹿を思い、悲哀に満ちた眼を額田王に向ける。

額田王は、そんな女帝の表情に、どこか恍惚とした情念が宿っているのを感じる。

朕には朕に対する愛のために死んでくれた恋人がいた、女人としての朕は、それだけで満足なのじゃ、と女帝は告げているようである。

額田王は大きく頷き、

「皇太后は幸せでした、私にはよく分ります」

と答えるようにしていた。

それは決して女帝に対する迎合の言葉ではない。額田王も、恋をするのなら、悲劇に終ろうとも、女帝のような素晴しい恋をしたい、と本心から望んでいた。

女帝が、入鹿との恋愛がいかに刺戟的で、素晴しかったかを、情感をこめて話すようになったのは、それからだった。

これまで、他の女官たちは、女帝が入鹿のことを話すと、黙りこみうつむいたり、なかには蒼白になったりしたのだ。

そういう点でも額田王は、他の女官たちと違っていた。
女帝が額田王を寵愛したのも当然のことであった。
香具山の北麓には千年もの昔からある、といわれている池がある。人々は磐余の池と呼んでいた。
薄の穂は風になびき、なでしこやおみなえしの花が秋の微風に媚びるように揺れている。
女帝は愉しそうに花を摘んだ。女官たちが水の入った竹筒に女帝が摘んだ花をさす。
女帝たちから数十歩離れた場所には、警護の兵士たちがいた。
「のう額田王、そなたは、花のなかではどんな花が好きか？」
女帝の傍に立ち、池に浮かぶ鴨を眺めていた額田王は、黒眼の勝った大きい眼を女帝に向けた。
こういう質問は額田王にとっては一番苦手だった。なぜなら額田王は、数えきれないほどの花が好きだったからである。
咲き誇っている大輪の花も、ひっそりと淋しげに咲いている花も、美しい、と感じる花はすべて好きだった。
「申し訳ありません、私は貪欲なのでしょうか、数えきれないほどの花が好きなのです、ただ、見る場所や、その時の気持によって、多少の好き嫌いは生じますが」
「謝らなくても良い、額田王のいう通りかもしれぬ、その時の気持によって、好きな花も嫌い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

になる時がある、そういえば、朕は大郎と愛し合っていた時は、どんな花も好きであった、桜の花など、朕を祝福してくれているようでとくに好きだった、だが大郎が殺されてから、昨年まで、散り急ぐ桜の花はあまりにも悲しく、見られなかった、朕の質問は、愚問というものだ」

「皇太后、そんなことはありません、どんな花が好きか、と問われたなら、好きな花の名前が、二つか三つ、さっと出て来るのが自然です、ことに女人の身であればなおさらのことです、私は少しひねくれているのかもしれません、母は早く亡くなり、あまり覚えていませんが、父には、顔に似合わない強情な童女だ、とよく叱責されました、私は、こうと思ったことは貫き通す性格のようです、男子に似ているのでしょう、それに童女のころは、性格に似ず、あどけない顔をしていたのだと思います」

額田王は、近江の湖で舟遊びをした時のことを思い出した。父に頼み魚釣りを愉しんだが、舟縁まで釣り上げた大きな魚に糸を切られ、あの魚を今一度釣るまでは魚釣りをやめない、と駄々をこね、父の命令を諾かず、泣きじゃくりながら父を睨んだ。

後で父は、そちの眼は恐ろしかった、女人にしては強過ぎる、と嘆息をもらした。

女帝は微笑した。

「額田王、そなたは今、男子たちの噂の的になっておる、肌は雪のようだし、絹のような光沢をおびている、それに容貌は眩しいほど美しい、大勢の男子がそなたを狙うのも無理はない、

ただ女人の幸せは男子にあります、といって、女人は自分の意を貫き通すことができません、そこが女人の悲しさじゃ」

といって女帝は嘆息をもらした。

額田王は小石を拾うと、池に浮いている鴨に投げた。鴨たちは飛沫をあげながら飛び、石の届かない場所に降りた。

額田王は首を大きく振った。

「皇太后は、無理に婚姻せねばならない女人の悲しさをおっしゃっているのですか?」

「その通りじゃ、女人は往々にして政略的な婚姻の道具として扱われる、大王家だけではなく、有力豪族の間でも同じことがいえる、そなたも世の習いにはさからえまい」

額田王の表情に強い拒否を見て、女帝は不審そうにいった。

「いいえ、私は、好きになれない男子とは婚姻いたしません、もし無理に婚姻しなければならないのなら、近江の実家、鏡山に戻ります、都に未練はありません」

額田王は自分にいい聞かせるような口調で答えた。

女帝と額田王の会話を盗み聞きしていた女官たちが、驚いたように顔を見合わせた。

女官たちは、大王や、皇太子の中大兄皇子から、夜の伽に参れ、といわれれば、応じなければならない運命にあった。それに、女官たちのほとんどはそれを望んでいた。娘たちを采女として大王家に差し出した地方の諸豪族は、彼女たちが大王や皇子の寵愛を受け、子を産むのを

望んでいたのだ。

そうなれば、豪族たちの格が上がるからである。

女人だけではない。豪族たちの若い子弟は、大王や諸皇子の舎人となり、警護の任に当る。大王家に服従する証でもあるが、舎人となり主君に信頼されると、都での出世も可能となる。地方豪族にとって名誉なことであった。

采女や舎人は、それぞれの氏族に期待されながら、大王家に仕えているのである。

額田王の発言が、女官たちに衝撃を与えたのも無理はない。

女帝も驚いたようであった。不思議な生物でも見るような眼で額田王を眺めた。

「申し訳ありません、勝手なことを申しました、たぶん、実家に戻っても父は受け入れてくれないでしょう、その場合は尼にでもなります」

「額田王、朕は何も怒ってはいない、謝らなくても良い、ただ、女人としてのそなたの将来は険しいのう」

と女帝は考えこむようにいった。

「はい、覚悟しております」

「しかし、そなたは勇気のある女人じゃ、倭国に初めて現われた新しい女人かもしれぬ、額田王、朕もそなたの力になろう、そなたが好きになれぬ男子が婚姻を求めても、そなたの意向次第だ、と朕が申そう、男子の権力や力では婚姻できぬ、とな、朕も、そういわれた時の男子の

顔が見たい」

と女帝は愉しそうに笑った。

たぶん女帝は額田王が示した女人の意志を認めたに違いなかった。それも女帝が入鹿と恋愛し、女人の悦びと悲哀を身をもって味わったからであろう。

額田王は近江の鏡山の麓で生まれた。父は息長氏系の鏡王で、母は大王・舒明が息長氏系の女人に産ませた娘だった。

舒明は八世紀中葉の漢風諡号だが、和風諡号は息長足日広額である。大王・敏達は息長真手王の娘広姫を皇后とし、押坂彦人大兄皇子を産ませた。皇子は蘇我・物部合戦の際、物部守屋に擁立され、蘇我氏側の手で殺された、と噂されている。

舒明は押坂彦人大兄皇子の子供なので、息長氏の血が流れていることになる。

一方、女帝の名は宝皇女で、父は押坂彦人大兄皇子の子、茅渟王だった。

宝皇女は舒明の皇后となり、中大兄皇子・間人皇女・大海人皇子を産んだ。舒明が死亡すると宝皇女は蘇我本宗家に推され、大王になった。

皇極女帝である。

皇極女帝が退位したのは、愛していた入鹿が、中大兄皇子らにより、眼前で殺されたせいであった。

鬱病に罹っていた女帝が額田王を寵愛したのも、王がたんに聡明で魅力的な女人、というせ

いだけではなかった。
女帝はあまり意識していないが、女帝自身に息長氏の血が流れていることも影響していたのである。
女帝たちが竹筒にさした花を抱え、香具山から板蓋宮に戻り始めると、西方から数騎の騎馬武者が疾駆して来た。
金色の杏葉や鐙、鞍飾りが西に傾いた陽に煌めく。
女帝の警護隊長、佐伯連諸山が兵たちを率い、騎馬武者の方に馬を走らせた。
「近寄るな、前大王、宝皇女様だ」
佐伯連諸山は槍を高々と上げると、大声で叫んだ。
「ご苦労、佐伯連諸山、吾は大海人皇子、母上のご機嫌をうかがいに来た」
山野に響く声は、まさしく大海人皇子であった。諸山が馬から降りて挨拶する。
大海人皇子は従者の舎人たちをその場に止め置くと、女帝の近くまで馬を走らせて来た。
紫の上衣に白い乗馬用の袴をはき、金銅の刀を吊した大海人皇子は十歩ほど手前で馬を止めると、身軽に飛び降りた。数歩進むと狭い路上に膝をつき、
「母上、ただ今、難波から参りました、花を摘み、山野を散策されるほどのご回復をこの眼で見、これ以上の喜びはございません、宮までお供つかまつります」
「朕に会いに来てくれて嬉しいぞ、ただ朕は病でも何でもない、この世の儚さが侘しく、しば

らく宮に籠っていたのじゃ、幸い若い額田王が朕に勇気を与えてくれた、朕がこうして山野を散策できるようになったのも額田王のおかげじゃ」

女帝は慈愛に満ちた視線を額田王に注いだ。

大海人皇子は立つと手で袴の汚れを払い、叩頭した額田王に白い歯を見せた。皇子は身長五尺七寸（約一七一センチ）強、肩幅が広く頑丈な身体だった。兄の中大兄皇子は色白だが、大海人皇子は、乗馬が好きで山野を駆けめぐっているせいか、顔は陽に灼け、大王家の皇子というより若い軍事将軍のようである。

冠は薄紫の繡だが、縁に金糸が縫いこまれていた。皇太子の弟のせいだろう。評判では、中大兄皇子と大海人皇子の兄弟は仲が良かった。

これまで額田王は、二人の皇子と何度か会っていた。中大兄皇子は白皙の貴公子で隙がない。好男子という点では、弟皇子より中大兄皇子の方が上である。ただ中大兄皇子は、皇太子という地位を自覚しているせいか、額田王に対して一定の距離を保っていた。

大海人皇子のように明るく笑いかけたりはしない。その点、大海人皇子は、額田王や女官に対しても冗談をいい、笑わせ、親しげに接する。

十八歳という若さのせいもあったが、大海人皇子に対しては気を張らなくてもすむ。

大王家の皇子なのに、大海人には山や草木の匂いが感じられた。その言動は豪放磊落である。

優雅な中大兄皇子に較べると動作は粗野だが、額田王は、大海人皇子に好感を抱いていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com